

ICM 裏通り散策

国際数学会議 (ICM) のプログラムは、午前中の全体講演と長い昼休みをはさんでの午後の分科会講演に分れていて、その他一般参加者にはポスターセッションで発表の機会が与えられた。前の二つが ICM の中心であろうが、ここは少しひねくれて、ポスターセッションおよび非公式に行なわれたセミナーについて感じたことを書いてみたい。ブランド商品もいいが、フリーマーケットの民芸品、骨董品、安物、偽物等々もまた楽しい。

ポスターセッションは講演会場の外の廊下に、一人たたみ一枚くらいの場所（もちろん壁に）が割り当てられ、そこに二時間ほど自分の仕事を紹介した自作のポスターを展示するという形式だった。ポスターといっても、多くは自分の論文のコピーを一ページずつ貼ってあるだけのものだった。当然このようなインスタントの展示よりきれいな絵や図のあるポスターが人目を引くが、目立つからといって信用してはいけない。ぼくが見た中で一番変だったのは、ピタゴラスの定理の証明を教える映画を作ったが、その映画は上映できないので、フィルム状の縁どりの中に主要なコマの模写と説明をつけて紙芝居のようにしたアイデア企画である。

発表者は自分のポスターの前で待ちかまえていて、関心のありそうな人を捕まえて説明を聞かせようとしている。そういう前を素通りするのは失礼かと思ひちょっと足を止めてしまうと、いらっしゃいませでな感じで近づいてくるので、かまわれたくない場合は買い物などのときの便利な表現“just looking”で引きとってもらった。プレプリント希望者は名前を書けという貼り紙だけして本人がいない場合も多く、これはカタログ販売形式といえよう。さらに、プログラムには名前があるが、行ってみると何もやっていないという開店休業、あるいは倒産状態のものもある。

ポスターセッションの様子はだいたいこんなもので、今後この形式が中心になっていくのかもしれない。京都のときの 10 分講演に比べて一長一短はあるが、少なくとも発表者の気分的には 10 分講演のほうがよいように思った。廊下でポケットと立って待っているより、聴衆の理解などおかまいなしの OHP シート 30 秒に 1 枚の高速回転での自己主張のほうがすかつとする。10 分というのは聴衆がこれにがまんできる限界としてもちょうどいい時間である。講演の予約だけして実際には来ない人がいて、時間に穴があいてしまうことが京都ではよくあったが、これはリコンファーム制度の導入で対処できる。

今回参加してみてももしろかったものに、非公式に行なわれるセミナーがあった。このようなものは毎日配られるニュースレターの中でアナウンスされるが、そうたくさんあるわけではない。ぼくが顔を出したのはウクライナの数学者の主催する複素解析学のセミナーで、ICM のプログラムの終了した夜 6 時から始まった。あとで夕ごはんもあるだろうから長い時間はできず（とはいえヨーロッパの夕食時間は遅い）、どんなやり方かと思ったら、ひとり 10 分くらいずつ自分が興味を持っている未解決問題を紹介するというものだった。

主催者側の人は全員が講演し、講演のたびに証拠の写真撮影までする。おそらくこれは旅費の援助関係に必要なのであろう（ちなみにポスターセッションもこの理由でする人が多い）。この行事がセミナーに多少のいかがわしさを加え、アングラ的魅力が増した。さらに後日、提出された問題を集めて本をつくるのだという。このような即興のセミナーが会期中にたくさん行なわれて、参加者も思えば気軽に呼びかけられるようになると ICM もより民衆のものとして活気づくだろう。

今回の ICM 参加者は、前回に比べて減少したらしい。全参加者の 1/10 が日本人であることから暗示されるように、ICM の観光化お祭り化、学問的にはあまり収穫のないものという認識が定着しつつあるように思う。さらに、電子メールの普及により国外の研究者との通信が容易になった現在、単に情報交換の場を提供するだけの集まりの価値はますます低くなった。そのような中で ICM が今後どうなっていくか、別に関心があるわけではないが、せめて講演形態に工夫があってもよいのではと感じた次第である。

（まつざきかつひこ／東京工業大学，数学）